

19

Alexander Madison Vedder の生涯について

布施田哲也

公立丹南病院

Alexander Madison Vedder (1831.9.29–1870.6.30 以下ヴェッダー) は、1863年(文久3年)米国海軍東インド艦隊ジェームスタウン号によって来日した米国海軍の外科医である。1865年に軍医辞職のち横浜居留地27番(のちに108番)で開業し三宅秀を指導した。また1868年よりは、ジョセフ彦の紹介で長州藩の藩主顧問医師になり三田尻の英学校でも指導した。王政復古後に兵庫へ呼び戻され、大隈重信や長州の木戸孝允や伊藤博文の縁で1869年県立神戸病院(Kobe General Hospital)の医療監督(Medical director)に着任している。その後、両下肢が麻痺する炎症性リウマチズの病気にかかり1870年米国に帰国し到着先のサンフランシスコにて病死している。

ヴェッダーの生涯は不明な部分が多かったが、弟 Elihu Vedder (1836–1923) が画家・詩人として有名であり Elihu Vedder 関連の膨大な日記、手紙、写真類が1962–64年に遺族よりスミソニアン学会 American Art に寄贈された。American Art の資料は2005年よりテラ財団の資金援助でデジタル化がはかられ順次アーカイブの公開が行われている。Elihu Vedder の資料も2007年にデジタル化されて現在“Smithsonian Archives of American Art”のサイトで閲覧可能である。大半が弟に関する資料であるが、ヴェッダー家の家系図、写真ならびに兄ヴェッダーからの家族あての手紙54通があることが分かった。これらの書簡のうち数通の断片については、1966年に英文発表されているが手紙を詳細にたどると11歳のころから亡くなる直前までのヴェッダーの人生が見えてくる。

特に1863年から1870年にかけてのヴェッダーの30通の手紙は、横浜、三田尻、下関、長崎、兵庫からの父・弟・妻・弟嫁への手紙となっており明治維新前後の日本観察にもなっている。その他米国海軍記録、米国外交関連文書、新聞書物および家族間の手紙等より明らかになった点を報告する。

ヴェッダー家は、15世紀の大航海時代にオランダより入植し幼少期は家族全員ニューヨークで暮らしていた。ヴェッダーが10歳のころ父親がキューバで歯科医として生活を始め、祖父、母、弟たちとブルックリンで生活していた。母が医師の不適切な診療で死亡し、また自立できる仕事を期待され、当初ホメオパシーの仕事をニューヨークで始めるも成功しなかった。1856年、安定した収入をもとめ海軍に入隊、軍医の道を進み1861年海軍外科医となる。1862年南北戦争の折、南軍船の追跡のためジェームスタウン号に乗船し、リオデジャネイロ、モンテビデオ、ケープタウン、パタゴニア経由でマカオに到着した。当初香港・上海方面へ行く予定であったが、香港は英国軍の影響が強く上海ではコレラが猛威をふるい、横浜にいた北軍ワイオミング号の支援、在留米人保護のため、日本に向かい1863年7月横浜に到着した。

日本の第一印象はとてもよく、日本人の長所は Brave, Ingenious, Skilled で短所は Pride, Self-conceit であると記載している。その後マカオ・福州で活動をおこなうも、1864年8月の四国艦隊下関砲撃事件に参加することになりジェームスタウン号で再来日した。米国軍隊として商船タキアン号を借り上げヴェッダーも軍医としてのりこみ戦闘に参加し、下関沖や横浜で負傷した英軍の負傷兵18名の治療にあたった。その他1864年ごろの横浜宣教師との交流、米国2代目駐日公使 Peyton について江戸での交渉参加、1866年江戸のコレラの流行調査、戊辰戦争の際に新政府軍より秋田へ派遣され約250名の新政府軍負傷兵の診療、兵庫県知事伊藤博文との県立神戸病院での雇用契約書、神戸病院の病院概要、発病後の勤務と神戸病院の評判等につき報告する。また1868年には弟への手紙の中で日本人論を展開しておりあわせて紹介する。